平成４年１月１４日発行

鵠沼

久　久　比　奴　末

はまゆう　と　櫻貝　と
海光る　わが故里

第　６３　号

内容　黙って見つめて　田中まさ子
湘南カヌースポーツクラブ奮闘記　取材記録
引地川☆☆☆故阿部　昭さんの作品（抜粋）

鵠沼を語る会

久久比奴末とは、「新編相模国風土記稿」（昭和 8年刊）で、”くくいぬま”と読みます。これは鵠沼の地名なのです。

†††前号（第６２号）の記事に誤りがありました。ご訂正下さい。†††

「マラソン青年・新城弘三翁に聞く」の文中２ページ．３行目・・飽きてやめてしまうのでダメ・・とありましたが、新城さんから書き間違いであるとお手紙をいただきました。取材者の不注意でしたのでお詫びします。お手紙の内容は、「フオークダンスや体操ついて飽きてやめた如く記述してありますが、現在も十数年来変ることなく、大いに楽しんでおります。これからも続けたいと思います。」です。　以上

黙って見つめて

田　中　まさ子

半世紀以上この鵠沼に住んで、いつしか私も歳を重ました。持ち時間の少なくなったのをひしひしと感じるこの頃です。

今のうちに、私の見たり感じたりしたことを書いておきます。さて、この頃、老齢社会とさかんに言われますが、誰しも老いを避けるわけにはゆきません。

私は鵠生園のディサービスを受けていますが、私を入れて３０人余りの方々と週に一回お会いします。とても楽しい一日です。職員やボランティアの方々は、実に善意に溢れて、お世話してくださいます。有りがたいことです。老人といえども、社会、政治、文化等を学んでゆく姿勢をもつている知識人も入居しておられ、食後の話題には、８月２２日のソ連のクーデターは失敗と誤算により三日天下となり、８月２６日には共産党が解散し、７４年の歴史が終わるなどのことがとりざたされます。そしてモスクワでは、歓喜の歌声がテレビを通して耳に入ります。

私達老人は、このウソの多い社会の片隅で、老人性痴呆又はアルッファイマーなどと言われながら、誠実に老いています。私の感じたことは、みなさん子どもの頃に、人格的教育を受けて来た人達ですから、しつかりした教育の原点を身につけておられます。しかし「近頃の若いものは！」・・・・などと言いません。世代の移り変わり、核家族の寂しさなどと言っても今更始まらないのです。自分の価値観を人に押しつけることはいたしませ

ん。明るく楽しく一日過ごせば満足なのです。
ただ、飢えを知らない、貧乏も知らないこの近代社会を黙って見つめています。こんな鵠生園の一日を私は見つめて、自分のために出来ることはしていきたい。みなさん、気負いのない、見栄のなく毎日で、老いもまた楽しいです。

文化の日も近づきました。この園でも文化祭をします。また、クリスマスには、ベートベンの第九を歌います。先日、市の”やすらぎ荘”を見学してきました。あまりの立派さに驚きました。そして、鵠沼の移り変わりの早さに目を見張りました。田圃も畠もなくなって、かつての緑は何処にも見えませんでした。

農村にも、漁村にも、まだ土地の風俗習慣が残っています。伝統のよさも、また人情のよさも、老人がいる間は守られるでしょう。自然発生的なよいものを守れたらいいと思います。近代化により、悪くなるのは寂しいことですが、もう老人が頑張る必要はありません。只、片隅で黙って見つめ、書き残しておきます。

おわり。

湘南カヌースポーツクラブ

吉田興一

この記述は、平成３年９月２５日にリーダーの小此木雪枝さんに取材したものです。

１．誕生

1980年（昭和55年）７月末、鵠沼公民館主催の”こどもサマースクール”で、カヌーの講座を実施したのが始まりです。30人位の集まりでしたが、講座終了後湘南カヌースポーツクラブとして独立したときは、１０人でした。最初は、公民館にカヌーボートを置かせてもらい、町内会の援助も受けてリヤカーで引地川べりまで運搬しました。県議の番場さんの”川に親しもう”と言う趣旨で出来ていた釣り場があったので、そこからカヌーを川に下ろすことができました。そして、竜宮橋と鵠沼橋の間あたりで練習を開始しました。カヌーは、自費で中古のを求めたのです。小学生なので、子供用のカヌーを集め、４～5艇で始めたわけです。いま、11年前の川を思い出すと、土手にはいろんな花が咲いたし、芝があって綺麗だし、水も汚れててなく、のどかでしたよ。練習のおかげで、潮の干満から浅瀬や流れの変化など今では知り尽くしてしまいましたね。川の様子は夏と冬では全然違うんですよ。この頃は、仕方がないことなんだけど、コンクリートで岸を固めてしまったので、５～６年前からちょっと雨が降ると水位がすぐに上がってしまうのね。宅地が開発されて、下水が完備しても、汚れが入ってきてしまう。親水護岸とかで、川をいじったから、砂が溜まって浅瀬ができ、藻ができたり、川全体は深くなったかもしれないが、干潮になるとよく判るんだけど、ボートを漕ぎにくくなった。子供も大きくなると、カヌーも大きく、深さが足りないとオリンピックにチャレンジするには心もとないのよね。いろんな選考会とか、試合に勝つていくには、十分な練習場にならないなぁと心配なの。

２．軌道に乗る

引地川は護岸工事をしたので、カヌーは一時、市の住宅供給公社の空き地に移したが、市の教育委員会のお世話で、今の鵠南小学校の隣の川辺りに落ち着くことができました。それでとても便利になったの。小学生にとつては、家も近いし、学校も近いし、練習にはすごくいい条件が揃っています。私の希望は、小学校や中学校にカヌー部が出来て、うちのクラブに入り、10年後の神奈川国体に出場出来る選手を養成したいの。その前の1995年

の本栖湖で行われる日本ジュニア選手権にいい選手をだしたい。すでに、うちでは、いい選手がでてジュニアの世界選手権に出たし、シニァでも、今年日本代表が出ていく。高校生で一人ウィーンにも出掛けたけど。七里ケ浜高校にいっている女の子です。私も監督で20人くらいの選手と行きました。本当は勝てないんだけど、高校生で外国を知るっていうのは凄い勉強になるんです。外国の選手あたりでは、高校生で10年漕いでいる。キャリヤの面では日本人は劣っている。外人はカヌーが好きでたまんないのよ。身体は同じ大きさなんだけど、キャリヤや体力も違うけど、体質が違うの。デブは一人もいないし、食事なども7.000 カロリーくらいのものを食べている。日本の高校生は、朝飯食って学校に行かなかったりすれば、3.000 カロリーで済ましてしまうわけね。そんな暮らしして、たまたま合宿にきてたっぷり食べたって、年間通して7.000 カロリー食べてガッチリとトレーニングなんかして育った選手とでは、私が細々とやる10年の選手とは、質がちがうのね。心では負けなくても、彼らの方がズーッとカヌーが好きで好きでたまんないのね。私だって好きだけど、練習のない日は、ほかのことで遊んじゃう。彼らはカヌーに乗って遊ぶんですよ。ソ連がペレストロイカとか自由圏に近づいたでしょう。あゝいうことがすぐ反映しちゃう。ポーランドとかハンガリーとか、上手に力を入れてきた国は、驚異的に強くなった。もともと強かったところに、のびのび練習できるようになったことが大きい。私が10年前に世界選手権を見に行った時と、いまのハンガリーの選手の変わりようは目を見張るくらいだった。やっぱりお互いアジア人だから、一週間程合宿してみても、親近感をもつているのが判る。ハンガリーが優勝してメタルなど取っていると、ひとごとじゃあなく嬉しかった。ハンガリーとポーランドは同位だった。こういう言い方してはどうかと思うが共産圏以外で自由圏では、一個もメダル取れないの。ドイツでも東ドイツがスポーツの代表になるように、スポーツが国を表現する手段なのね。日本はチョコチョコって選考会やって高校生が代表になるわけだが、あっちは国の中で、戦争や政治のゴチァゴチァがあるわけでしょう。例えば東ドンツなど、国がなくなって選考会など、ドイツでやるわけでしょう。移民とか難民とかが流れて来るんだが、その中でカヌーに強い人が混じっている。ゴチァゴチァでも、ゴチァゴチァをバネにしいつょくなってきている。選考会などで、本当につょい者が選ばれる。選ばれなかった者は、なぜ選ばれなかったかを考え、一層練習

に力を入れる。日本はチャンスが少ないんたけど、安定しているから逆に勝っちゃつたとかいうことあるけど、激動が無いから余計に強くなれない。ハンガリーとかは辛い中で頑張ってくるから、試合など楽なものになる。国内だけで、厳しいんだから、海外へ出ると食べ物はあるし、練習なんかでもいいカヌーがあるし、設備はいいし、一本漕ぐなんて簡単なことでしたね。民族が混ざるっていうことは強くなることですね。日本人がドンドン世界へ出ていったり、外へ出ていかなくても、他の県へ出掛けて留学してみたり、そういう気持ちにならないと強くなれない。外国では、選手の移籍はずっとスムースで、日本じゃ出場停止とか、干されちやったりとかそんなことで苦しいの。他所の国に行ってプロになったり、外国ではそんなことが出来るんですよ。カナダなどノンビリしているが、ハンガリーは隣のユーゴーで戦争があったりしている。日本人は呑気なんですよ。むこうの新聞など読めないのはしょうがないし、テレビなど言葉が判らないのでしょうがないけど。あっちは大人も子供も国境を境にしていることに凄く敏感なの。どうした、こうしたが皆よく知っていて、もう何年前からどんな問題があるのか詳しく知っていて、食堂のオヤジなど、「あなた、どう思いますか。」って聞いてくるわけ。私達は対応できない。いくら日本で新聞を読んでても、他人事なのでそう詳しく考えているわけではない。日本人にはどうでもいいわけでも、戦争で人が死んでいるでしょう。ひどく敏感で、食堂のオヤジまでがカンガン言ってくるわけね。この国では、20年も問題になっている事ですからね。日本では、いま与えられてた練習をするだけじゃあ全然ダメなのよね。遊ばされて、ノンビリやるのも一つの方法だけど、なるべく自分の身の回りのことは、親から離れて独立して自分で考え自分で出来るようにしないとダメ。親も学校の先生も、塾の先生とか、皆で子供を甘くしてしまっている。できれば、親もあゝいつた所へ行って、いま忘れてしまっていることを思い出したり、簡単なことがたった一日あれば、日本では忘られちゃつていることに気がつくてしょう。ハンガリーなど30年は遅れていて、洗濯機など無かった。重くて落っことしてしまいそうなアイロンなど使っている。熱くなれば、手でさわれないほど熱くなり、ぬるければ極端にぬるいままでいたり、なんだか配線が切れたような妙なアイロンなんだけど、手入れしてピカピカ磨いて使っている。日本じゃあそんなアイロンすぐ捨てちゃうしさ、世の中電化されているんだから、確かに日本は便利だけど、何か忘れて

いるものが沢山あるような気がする。

3．課題

カヌーもぜひジュニアを15人とか、シニァを5 ～6 人とか合宿で海外にやりたい。日本では、カヌーの人口は、圧倒的に少ないでしょう。レジャーカヌーは多くなるが、競技ということになると、水には濡れるし、筋力もいるし、持久力もいるし、ボール蹴つたりするサッカーでもそれだけで苦しいのに、カヌーはそれ以上苦しいわけね。いろいろの抵抗があるわけ。しかし、ひとたび楽しめるようになると、皆一生続けるんですよ。あれやつたり、これやつたりではなしに、自分のライフスポーツにして、凄く大事にするわけ。小さな子供にあまり厳しくするとすぐ止めてしまうでしょう。だけど、最低限のことだけは小さいからこそ出来なきゃならないことがあるんです。私考えちゃうんですよ。おおきくなつてからでは、出来ないこともあるし。小学生のときは楽しんでいいんですけどね。

4．今までの成績と抱負

実はうちのクラブは強いクラブなんです。公民館活動の範囲ではないと、お叱りを受けるくらい頑張るんですよね。せつかくこんなところにいて、遊びじゃあつまんない、やるならチャンピオンになりたいしね。オリンピックに出たい気持ちはみんなが持つている。今年（取材時点）91年がウイーンでしょう、その前の89年がカナダ、87年がユーゴーというかたちで、運よく海外でやるチャンスがあるんですよね。89年はカナダのほか、インドネシアに行ったんです。これはアジア選手権ですね。ウイーンに行った年にうちのクラブを卒業した子がパリの世界選手権に行ったんです。この子は武藤恵子（19）といって、この子は高校を卒業してオーストラリヤにカヌー留学したんです。みんな体育大学に行くのが、普通の高校生なんですが、思い切って海外へ行く子がでてくるなんて凄く私は嬉しいんです。私は高校生がジュニアで行くように力いれてるんだけど、うちのクラブは、シニアで世界選手権に行けるようになるだろうとか、日本チャピオンにもうちしか旗があげられないだろうと大翌癪かうほど強いんです。ワンジェネレーションで、8 ～9 年で盛りがくるんですから、いま小・中学生から基礎を作り始めて、95年くらいまで頑張って日本代表選手を出したいなと思っている。日本は一向にメタルが取れないんですよ。世界ジュニア

選手権は世界では高校生なんだけど、日本では小・中・高校生なんです。私は小学生から始めて、中学生まで仕込んで決勝にあがれるようにし、高校生では、チャンピオンを狙いたい。

5．現況

うちのような貧乏所帯の個人クラブでは賄いきれないくらい他所はうちを目標にやってきたんです。団体がらみでやるわけでしょう。そんなところは 3.000万の強化費て、オンブにダッコで、着るものから身ぐるみ援助でやっている。うちなんかは、外に出るにもカンパしてなければならない。よそなんか1円の心配なくやっている。そんなこと考えると金の力も必要なんですよ。頭使って凄いくらい練習しているつもりなんだけど、ヤッパリボートやら何やら、ドンドン新しいものを買いつないでいかないと苦しくなっちゃう。ただ、そうなると、国体レビューじゃないけれど、与えてもらえるのが当たり前な気持ちにだんだんなっちぁつたら、変な子ができるでしょう。うちは皆自分の小遣いからある程度我慢して、好きな運動を、親からやらせてもらえるんだからと自腹切っている。お金も必要なんですよ。海外へは、40万の個人負担です。県からも国からもお世話になるんだけど渡航運賃とか、合宿とか、それと道具一式てすね。あれやこれやで 100万かかるところを半額補助という形です。日本カヌー連盟からの派遣選手ということで。

6．希望

選考会は6月頃で、今年は本栖湖でやつた。専用のコースがあり、95年は国体をそこでやろうと思っているから、スポーツセンターとか、合宿場とかが考えられている。出場する側も、途中運搬するのが大変で、大きなカヌーを持参するのだから、専用のトレーラーが欲しくなる。車で移動できれば、すごく楽になるわけね。私のとこはちゃんとそれが出来なくて、公民館からテントを借りたり凄くお世話になっている。テント一つでもあるとやっぱりうんと違うのね。カヌースクールやるのならあっちは町ぐるみ援助している。例えば鵠沼海岸カヌークラブが出来て、小・中・高校生20〜30人くらいのサークルが出来れば、いろんなことでやり易くなると思う。今年の石川国体では 3位だった学校が出ないから、神奈川は選抜チームということになって仕舞う。例えば、500 ㍍で 4位、300 ㍍で 3位、総合的に神奈川県チームは 5位だった。1 位が今年の石川県 2位が来年の山形県、3

位が再来年の香川県、4 位が次の年の愛知県、5 位が神奈川県。強化費は石川、山形、愛知などは何千万の強化費でやっている。神奈川県は少ない。うちなんかは、10万くらいで手弁当でやっている。自衛隊の少年工科学校もうちと同じようにいい点をとる。湘南高の通信学級だとか夜間へ通いながら、クラブ活動でカヌーがあるの。どちらもクラブ活動でやっていて神奈川が 5位に入るなんて凄く助かっているの。選手層が薄いんです。こんなに頑張った時くらいは神奈川新聞が来てほしかった。うちは広報活動が弱く、私は練習で手一杯で、時間があったらドンドン練習がしたい。鵠沼では、うちのクラブを知らない人が沢山いると思うけど、素質のいい子を探して加わってほしい。親の理解があって練習やらしてくれる家があったら嬉しいんだけど。なかなかそんなチャンスばないんで、八民館のカヌースクールやりながら、4 ～5 人クラスに入ってくれればありがたい。いま、40人くらいいるんだけれど、一遍に活動するのは苦しい。学校の都合みてはやっている。親が組織している後援会があり、年に 2 回ほどバザーをしているけどもっと後援会に入ってくれるスポンサーが欲しい。それをやっている暇が無いんです。まったく資金面で苦しいんです。5 ～6 艇のカヌーを皆さんの援助で20艇にまで増やし、それを上手に管理しなくてはならないの。競技用のは一人乗りで25万くらいする。レジャー用なら10万くらいです。うちではせいぜいペァーがあればよい。県内にはカヌークラブはうちと、自衛隊と県立平安高校とＹ校です。高校で増やして高体連に入るのが一番いいの。私立で小中高とつながっている学校で、受験の心配のないところが理想ね。選手で強くなるには、子供に工夫する意欲と能力がないと大成しない。例えば、藤沢高校に強い子がいたら、部を作ってもらいたい位でいます。飛びぬけて強い選手は出ないと思うが、国体くらいには出場できるでしょう。

＊ 1991年の「わたしの藤沢」No.28号のＰ．42に湘南カヌースクールのミニ紹介が出ています。ひとつ、目を通してください。＊

以上で終わりですが、私もこの記事を書きあげながら、次のような感想を得ました。引地川の河口に出てみれば、東に江戸時代の庶民に親しまれた、信仰の島である江の島を眺め、西には富士山を真ん中に右に丹沢山塊を、左には箱根・天城の山々を望むことがで

きる。この湘南の香り豊かな地に誕生した湘南カヌースポーツクラブは、わが鵠沼の近未来の顔として、大切に育みそだてるに相応しいものと言える。鵠沼の町をあげてバックアップしてゆきたいし、これを提唱するのも”鵠沼を語る会”の義務的仕事であらう。この”語る会”は、郷土史として過去を調べ、まとめることだけではなく、現在・将来と3元探究も忘れてはならない。過去に目をやるばかりで老け込む誤りを排除していこうとも思う。この取材を機会に具体的には、鵠沼のカヌーを後援する会を増やしたり、商店街でもカヌーグーツを売り出したり、また、カヌーサブレーを名物にしたり、夢をふくらましていきたい。この機関紙を目にした方々のお力添えを願いたいものである。

終わり

藤沢市・引地川

『川』――――――――――――――――――――――阿部　昭

※　この文章は、1991年の鵠沼公民館祭りに、”鵠沼を語る会”が発表した「引地川、調べてみれば」において、参観者にお配りしたものです。阿部　昭さんは、惜しくも若くして亡くなりましたが、波の音の聞こえる辻堂東海岸の海辺の家で、作家活動をされていた郷土の誇る文人です。※

山の子も、街の子も、海の子も、きっと暮らしのどこかに”川”はある。大人になって心に抱く、ありし日のなつかしい風景の中にも、おそらく”川”はあるだろう。大きな川であっても、小さな川であっても、彼のように・・・。

生まれた地こそ広島であめが、阿部昭は昭和十年の春、生後半年ほどで藤沢の住人になっている。そして、同年十二月、一家は鵠沼海岸の新居に落ち着く。以後、住まいは移すものの、彼は生涯を藤沢で送り、私小説的な短編作品を中心に、その才能を発揮していった。湘南をこよなく愛した彼の作品には、この地が様々なかたちであらわれている。

こんな一文も登場する：『川』は、小さい頃から親しんできた引地川を舞台にした短編小説で”僕”の脳裏に浮かんでくる過去の記憶や現在の出来事が次々と語られていく、昭和四十四年の作品である。

▦

漁師の通り道であった川口近くの竜宮橋。この橋の下で、年上の少年と座っていたある日の一場面も描かれている。

いわゆる不良であったその少年は、その日も”僕”が家から持ち出してきた刻みタバコを吹かしながら、”僕”には理解できない性の話題などを提供するのだった。”僕”はその間、引地川の水の流れを眺めていた。終戦の歳の夏の日のことである。それは、流れるというよりは、もっと大きな水のかたまりに静々と押されたり引かれたりしているように見えた。

敗戦後、少年は何か大きな悪事をはたらいて捕えられ、その後二度と会うことはなかった。

また、草野球の行き帰りに渡ったのが、一つ上流の稲荷橋。ここは、”僕”が一番よく通った橋である。そこからすぐの松林には、海軍通信学校の廃墟があり、その下の広い砂原が”僕”らの野球のグランドであった。

勉強が忙しくなるにつれ、一時疎遠になっていたこの川も、大学に入ってから再び身近な存在となる。友達の女子大生と二人、川ぞいの道を歩いた”僕”の思い出もつづられている。

日が沈む寸前の引地川の水面は、うるんだ目のような、ふしきなやさしい鈍い光をたたえていて、僕らのそぞろ歩きのちょっとした景物だった。

だが、その彼女に対しても、愛しすぎたがゆえに、やがて求めるものさえなくなっていく。

そして、小学校入学も近い子どもを持つ今の”僕”は、ある日、その海辺の小学校長として赴任してきている、かつての国民学校の教師と巡り会う。二十何年ぶりに見た、その姿！街は変わる。そして人も変わっていく。

▦

さらに二十年以上という歳月が流れた今、稲荷橋にやって来た。ここから上流に向かっての川ぞいは、緑に囲まれた「川べりの散歩道」として整備され、人々の憩いの散策路となっている。かわいい声が聞こえてきた。小さな子どもたちが、元気よくペタルをこいで橋を渡ってくる。穏やかな初夏の陽ざしを水面にうつし、緑の風と戯れながら、引地川はゆっくりと流れていく。

山や森の中に端を発し、旅路の果てに海へとそそぐ川の流れは、この世に生を受け、成長し、やがて巣立っていく人の人生にもたとえられるだろうか。あの子どもたちには、この先どのような未来が待っているのであろう。明るく、たくましく、夢を忘れずに育っていってほしい。

おわり。

「鵠沼」第６３号
平成4 年1 月 14 日発行

黙って見つめて
田中まさ子
湘南カヌースポーツクラブ
奮闘記　取材記録

引地川　（抜粋）

編集・発行　鵠沼を語る会

鵠　沼　公　民　館
電話 33-2001
藤沢市鵠沼海岸 2-10-34